2020年5月20日発行　　第51号（通巻232号）

# 産教連通信

技術教育と家庭科教育のニュースレター

産業教育研究連盟発行
http://www.sankyoren.com

目　次

□ コロナ禍で学校はどうなる？ ………………… 1
□ シリーズ「学校現場はいま(10)」
コロナ禍をきっかけに学校教育について考える　編集部 ………………… 2
□ エッセイ 『いのちと平和』の大切さを心に刻む看護学校」　山田　功 ………………… 4
□ 連載「風の文化誌(25)」　三浦基弘・小林　公 ………………… 6
□ 連載「農園だより(49)」　赤木俊雄 …………………10
□ 常任委員会からのお知らせ …………………12
□ 図書紹介 …………………13
□ 編集部ならびに事務局から …………………14

## □ コロナ禍で学校はどうなる？

新型コロナウイルスの感染拡大により、学校は大変な状況になっています。全国のかなりの数の学校で、今年(2020年)3月はじめから3ヵ月近くも満足な授業が行われていないのですから、まさに異常事態です。

小学校では、今年４月から新教育課程による授業が始まることになっていましたが、いつ授業が開始できるか、授業が軌道に乗るのはいつなのか、見通しが全くつかないというのが正直なところでしょう。中学校では、来年度から使用する教科書の採択の年にあたっていますが、今はそれどころではないでしょう。

技術教育・家庭科教育だけでなく、学校教育全般にわたって意見交換する場が必要とは感じつつも、研究会や全国大会を行うにはほど遠い状況なので、産教連ネットを活用するなどのWeb利用でと考えています。

過去の全国大会の展示教材

シリーズ ▶学校現場はいま…… 10

# コロナ禍をきっかけに学校教育について考える

編集部

新型コロナウイルスによる感染拡大が止まらず、首都圏をはじめとした７都府県で緊急事態宣言が出された４月上旬、産教連ネットにある発言が情報発信されました。発信者は本誌連載の「農園だより」執筆者の赤木俊雄氏です。それに関するやりとりが産教連ネット上でありました。そのやりとりを再録したうえで、学校教育について改めて考えてみたいと思います。

先日、勤務していた学校の教頭から電話があり、技術科担当の新たな教員が赴任するということでした。私は、現任校に引き続いて勤務する希望を出していました。他校に行く気はないので、退職せざるを得ません。

私が教師を続ける理由は次のようなことからです。

1. 技術・家庭科の豊かな実践を多くの子ども、親、そして国民に伝える。
2. 技術・家庭科担当の教員が働きやすい環境を作ること。
3. 大阪府の「教育の集い 技術・職業分科会」(編集部註：大阪教職員組合主催の「教育の集い 大阪」の教科別分科会の一つ)世話人の後輩を作ること。

今まで、毎日、このようなことを考えていましたので、現在の心境はこうした想いを突然断ち切られた気持ちです。私が今まで活動できたのは、皆さんとどこかで出会って勇気と元気をもらい、それを教育に生かしてきたからだと思います。何としてもこの想いを実現したいと考えていますが、今のところよい方法が見つからないでいます。

(大阪・赤木俊雄)

せっかく翌年度の準備していたのに，突然の雇用契約の更新ならずで、無念なことと想います。パイナップルの収穫を楽しみにしていたのですがね。長い間、ご苦労さまでした。

(東京・藤木勝)

臨時的任用教員の身分の不安定さは以前から問題になっていました。採用側の裁量で何が起こるかわかりません。教育の継続性を守るには、この制度はふさわしくありません。

今回の新型コロナウィルスによる学事暦の変更などで、時間講師などの臨時的任用教員がどのような影響を受けているのか、心配しています。

(新潟・鈴木賢治)

今回の雇い止めの件で皆さんから激励のお便りをいただいています。同僚の石野さん(編集部註：石野愛枝氏)からは「技術・家庭科の知識は退職後も役に立ちます」というお便りがありました。また、野田さん(編集部註：野田知子氏)からは「熱意はす

ばらしいです。学校教育だけにこだわらず、地域で行ってみてはどうですか」という助言もいただきました。

本当にありがたいことです。地域での食農活動は今までしたことがありませんでした。今、実家のある岡山にいますが、倉敷市の子ども食堂で出会った小学校５年生の児童に尋ねると、学校では稲の栽培はしたことがないそうです。田植や稲刈りの経験はないけれども、おじいちゃんにトラクターに乗せてもらった経験はあるそうです。

ありがたい助言をいただいたので、早速、実践してみます。まず、近所の子どもに稲作りの体験を聞いてみます。（大阪・赤木俊雄）

5月に入り、その対象地域が全都道府県に拡大されていた緊急事態宣言が5月末日まで延長されました。多くの学校がそれにあわせて休校となっています。小学校に入学した新１年生は、はじめての学校生活を経験できないままです。また、４月に進級した小中学生も、新しい教科書は手にしたものの、教室での授業を受けられない状況が続いています。楽しい学校生活ができず、子どももその保護者も辛い思いをしているはずです。

一方、学校で子どもたちの指導にあたる教員も大変な思いをしています。殊に、この４月から教壇に立つことになっていた新任教員はどのような初任者研修を受けているのでしょうか。それ以上に問題となっているのが、前述したような非正規教員の処遇です。

今回の新型コロナウイルスの感染拡大に伴う学校の休校継続に関連して、学校の９月入学が話題に上り、議論が始まろうとしています。教員同士が集まっての研究会はしばらく見合わせる必要がありますので、議論は産教連ネット上で行いたいと思います。

**栽培管理は大変です**

春の野菜や果実類の管理は大変です。ジャガイモなどは、早く植えすぎると新芽を霜にやられてしまいます。芽はまた出ては来ますが、やっかいです。「今年は自然に任せて、キュウリなどを種まきするか」と考えています。

日本海側の春は雨が多く、我が家でも圃場の準備ができていません。今日は耕せないので、草刈りをやることにするかな。（鳥取・下田和実）

エッセイ

# 「いのちと平和」の大切さを心に刻む看護学校

元勤医会東葛看護専門学校校長
山田 功

## ■ 思いがけないお誘い

ルイアラゴンの詩に「学ぶとは心に誠実を刻むこと」という言葉が出てきます。私は晩年にさしかかって、若者が心に『誠実』を刻みながら成長している学校が、本当にあることを知りました。現代の日本に、です。その名は東葛看護専門学校。千葉県流山市にあり、春は菜の花が美しく咲き乱れる江戸川の土手の畔にある学校です。

写真1 三上満氏（右）と筆者（左）

今から15年前、三上満元校長（写真１ 元全教委員長で金八先生のモデル）から「素晴らしい看護学校があるんだ。山田さん、僕の後を引き継いでくれないか」と声をかけられたときは、突然のことで、腰が退けました。しかし、誘われて半信半疑のまま、その学校を訪問した日に、私はもうこの学校に心を奪われてしまいました。ちょうど「平和と医療の研修旅行」でベトナムへ行く直前で、校長室に三人の学生たちが質問に来ていました。その質問は何かというと「ベトナムの障害児教育はどうなっていますか」という質問でした。ベトナムは昔、戦争で数百万人の命が奪われた国です。その遠い国に戦争の後遺症で苦しむ子どもがいることを知って、その教育に心を寄せている若者が、いま私の目の前にいる！ 笑顔で答える三上校長から「山田先生も何か知っていますか？」と水を向けられ、その対話に夢中になっているうちに、気がついたら帰りには「校長になる」ことを引き受けていました。怖いもの知らずに！ です。

## ■ 失敗の原因をみんなで解決

写真2 卒業する看護学生と校長（筆者）

看護の知識が全くない私は、まず学生（写真２）と一緒にノートをとって学ぶことから始めました。すると、いのちに向き合う学習ではミスが許されず、結構厳しいのです。しかし、それだけに、限りなく暖かい空気に教室が包まれる場面にしばしば出会いました。

その一例だけ書きます。ある学生が、病院実習のとき、トイレの介助で患者さ

んの頭を壁にぶつけてしまったことがありました。実習でこんなミスをしたら大変です。これでは不合格になるかもしれません。すると、クラスメイトは全員で教室の中にトイレの壁を段ボール箱で作成し、車椅子で入る練習を繰り返しました。そして「どうしてアクシデントが起きたのか」を検証し、分かったことを黒板に板書しました。その結果を含めて、失敗した学生が実習レポートを完成させ、発表するときは、もう涙が止まりませんでした。仲間と共同して学びあい、その中で『新しい自分』に変身していくのが『学校』。東葛はそういう学校でした。

医療看護の世界では、誰かが困っているときに、その人を孤立させてはいけないのです。「医療看護は、共同の営みである」という、民主的な医療の先人たちが掴んで来た大原則を、若者が涙とともに学んでいる姿――「学ぶとは誠実を心に刻むこと」という言葉どおりの姿でした。

## ■ 命の大切さと生存権

私がこの看護学校でもう一つ驚いたのは、一にも二にも三にも『いのちの大切さ』を土台にした骨太の教育課程がしっかりできていることでした。ご承知のとおり、日本国憲法第25条には『生存権』が書かれており、世界保健機関憲章には『健康の定義』が書かれています（注：健康とは、単に疾病がないというだけでなく、肉体的・精神的に健康で、しかも社会的福祉の状態であること）。これを考えれば、東葛の教育の土台に「いのち・平和・人権」が据えられているのは当然と言えます。そして、「病気はベッドの上で起きるのではなく、生活の場や仕事の場で起きる」ので、それを座学や実習で学ぶだけでなく、学校内外で深く学ぶ、グループワークや地域フィールドが準備され、その総仕上げとして三年生には研修旅行が準備されていました。冒頭にベトナム旅行の事前学習の光景を紹介しましたが、私はその後、校長・講師の14年間、『平和と医療の研修旅行』の事前学習を担当しました。それは楽しい授業でした。最初の研修旅行(2005年)は沖縄でしたが、帰って来た学生たちは「高校生のときとは全く違っていた」「医療も、健康も、観光も、平和という一本の線で結びついていた」と、目を輝かせて発表していました。昨年(2019年)は、学生たちが投票で旅行先を韓国に決定しました。正直に言って、私はその勇気に驚きました。日韓関係の悪化の中で「アブナイから止めたほうがよい」という声も聞かれたなかで！ です。帰国後、実際に行ってきた学生たちは、「韓国に行ったらテレビ報道とは全く違っていた。韓国料理のキムチはイマイチだったけれど、市民や医療者は本当に親切で良い人たちだった」「韓国は民主化の歴史もあり、市民が一回目でダメだったら、二回目、三回目と階段を上るような努力をしていた」と、生き生きと報告してくれました。

私は東葛看護専門学校を体験したおかげで、「現代の若者の心は、私が育った青年時代の若者の心と少しも変わっていないのではないか? ただ素敵な出会いの体験が少ないだけではないか」と、心からそう思えるようになりました。これは一人の老人の白昼夢ではありません。今日もまた、この学校では、『誠実』を心に刻みながら、若者たちがプロを目指して学びを深めています。

三浦 基弘
小林 公

# 風とこれからの社会

## ■ 風と水連携の省エネ空調

温室効果ガスを削減する、すなわち低炭素社会を実現するには、電力などのエネルギー消費を抑制する必要がある。一般に、ビルの空調システムは、夏期のピーク負荷に合わせて設計されているが、実際には、部分負荷での運転が大半を占めており、この状態でのシステムのエネルギー効率はあまり高いとは言えず、これを改善すれば大幅な省エネルギーが期待できる。

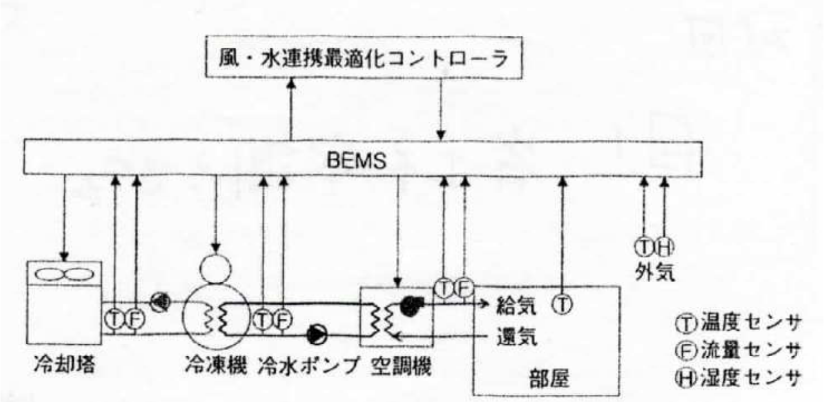


図1 省エネ空調システム

省エネルギーを目指した空調システムの構成例を示そう（図１）。冷却塔と冷凍機からなる冷水製造装置と、その冷水を冷水ポンプで各部屋に運ぶ搬送系、この冷水と部屋の空気を熱交換し、同時に換気も行う空気調和機からなる。中央監視装置に設けられたBEMS（Building Energy Management System：ビルエネルギー管理システム）内にコンピュータによる最適化コントローラを構築し、水と空気（風）のネットワークを互いに連携させ、空調システム全体の消費エネルギーが、与えられた空調条件下で最小となるように、空調運転状態を最適化する。たとえば、冷凍機は一般に冷水の送水温度を上げれば効率が高くなるが、一定の熱量を運ぶためには流量を増やす必要があり、冷水ポンプ動力が大きくなるという、相反する関係にある。このような関係を冷却水系、給気系を含めたシステム全体のモデルを用いて最適化し、冷却塔からの冷却水の送水温度と流量、冷凍機からの冷水の送水温度と流量、および、空調機から部屋への給気温度と流量などの設定値を求め、この値に基いて空調システムを制御する。

最適化コントローラは、空調の設定温度や外気の温度・湿度計測値、空調負荷などの空調条件に対して、最適な運転条件を演算し出力する。演算の安定性およびリアルタイム性を確保するため、空調条件を入力し、運転条件を出力する近似関数（運転関数）を設定しておき、実際には、この運転関数を用いて制御を行う構成になっている。これを進歩させれば、AI（人工知能）になる。この風と水連携の空調システムを性能評価したところ、従来用いられてきた定風量および可変風量方式の空調に比べ、それ

ぞれ約30%、約10%の省エネ効果を達成した。

## ■ 拡大型社会の反省

こんな声を耳にする。「やれ風力だ、やれ太陽エネルギーだと叫んでも、そんなキレイ事で、とても現在の社会を支えることはできない」と。そのとおりかもしれない。経済成長を至上主義とする拡大型社会、そして、その駆動力になっている競争原理の社会を続ける限り、たとえば、上に述べたような省エネルギーの努力をしても、新エネルギーによる発電、特に風力発電の貢献度は微々たるもので、まさに「燈心で竹の根を掘る」に近い観がある。その拡大型社会が招いた温室効果ガスによる地球温暖化は、いよいよ現実味を帯びて来た。現状の社会を維持しつつ、環境負担を著しく減少させるような、抜本的な技術革新が見出せない今、将来への選択は、成り行きに任せて環境悪化を受忍するか、それとも社会を友愛的・利他的に変えて、それを回避するか、二つに一つである。

人類はずっと、地球の自然は雄大なもの、際限がないものとして扱ってきた。つまり、原材料もエネルギーも無限に入手でき、廃棄されたものは自然に浄化されるという暗黙の前提で、自分たちの技術と社会を発展させてきた。たとえば、長い間、発展を支える生産量Qは、資本Kと労働Lと $Q = AK^{\alpha}L^{\beta}$ の関係にあると考えられてきた。ここで、A, $\alpha$, $\beta$ は係数($\alpha + \beta = 1$)である。さすが近年になり、資源Rの重要性に気づいて、$Q = AK^{\alpha}L^{\beta}R^{\gamma}$、ただし($\alpha + \beta + \gamma = 1$)と修正された。確かに、資源の消費を増大させない経済成長はあり得ないからだ。しかし、それでも今日まで、地球の有限性を軽視した経済原理が、無限の経済成長を要求し続けてきたのである。

拡大型社会に欠かせない要素に流通技術があり、交通・物流・情報の高速化・広域化は経済成長の象徴である。この広域流通は、自分の住んでいない土地の環境に対して、無関心、無責任にさせる傾向がある。たとえば、自国優先の生活向上や温室効果ガスの排出は、他国の森林を破壊し、海抜の低い国の領土を狭める。また、欧米文化がグローバルに世界を画一化しても、化石燃料消費文明時代が去ると、欧米文化の優位性は効力を失い、ずたずたにされた伝統文化は「覆水盆に返らず」となる。

風力や太陽光、その他の新エネルギーによる発電を増大するには、多くの人工的な設備機器を必要とする。しかも、それら機器の生産には、金属と電力が欠かせないので、クリーン電力で電力関連設備機器の一切を再生産することはできない。つまり、すべての電力を再生可能なエネルギーで賄うことは無理なのである。エネルギー源が何であれ、電力依存型社会、すなわち再生不可能資源依存型社会は、原理的に持続不可能である。

大量消費と環境的持続可能性を両立させるような技術はない。大量消費を前提とする拡大型社会は、やがて持続不能となり、崩壊の道をたどる。小手先のマイナーな技術改善による対応策は、次第に困難さを増し、期待したほどの効果は得られない。また、革新的技術は必ずしもタイムリーに現れるわけではない。技術は万能の神ではなく、人間の創造力で自然の法則は変えられない。何でも望みどおりの技術が実現でき

れば、今日のような多くの問題は起きていない。では、この成長欲求と環境保護のディレンマをどう解消すればよいか。

## ■ 縮小社会の志向

ここで頭を切り替える必要がある。持続可能な大量消費社会は、どんな技術をもってしても実現不可能である。やがて起きる人口減少とリンクさせて、社会を縮小するしかない。資源・エネルギーは持続可能な範囲内で利用し、汚染源を縮小することで環境悪化を食い止める。もちろん、汚染防止対策の必要性は残る。特に浄化されずに海洋に浮遊する微細なマイクロプラスチックは、やがて地球の生態系にダメージを与えかねない。縮小社会化はさまざまな分野で物心ともに縮小変革を要求する。自然法則に逆らわない、成熟した社会の実現を期待する。物欲から、また過当競争の自縛から解放された人間的な社会、人間と自然とが融合一体化した社会を希求する。

社会の縮小化には、頭に染みついた拡大型発展観を払拭する必要がある。拡大型の発展観・進歩観は、市場経済や経済成長主義と結びついた思想である。生産性が高いほど優れた文明であり、物質的に豊かになることが進歩・発展で、特に経済的（金銭的）に豊かになることが幸福であると考える。安く大量に手に入ることは良いこと、手を汚す第一次、第二次産業の従事者が減るほど高級な社会、エンゲル係数が低いほど生活が向上したと考える。競争は社会の進歩・発展と個人の至福獲得に必須であると考え、そのため富裕な家庭の子どもに有利な名門校受験が激化し、学力観・能力観が歪められる。これらの思想をすべて一掃しなければならない。社会の縮小化には物理的・技術的障害はない。障害があるのは心理的抵抗のみで、その気になれば精神の切り替えは可能である。ならば、社会を縮小して、江戸時代にでも回帰しろと言うのか？

## ■ 江戸風の見直し

江戸時代の生活スタイル、いわゆる江戸風（ふう）の生き方には見習うべきものがある。たとえば、今回の冒頭に紹介した冷房について考えれば、古くから行われてきた「打ち水」というのがある。はじめは神さまが通る道を清めるという意味であったのが、江戸時代になると、むしろ、土ぼこりを防いだり夏の涼を取ったりする、実用的な目的に変わっていった。打ち水で撒いた水は、蒸発によって地面の熱を奪い、わずかではあるが気温を下げる効果がある。2003年に「大江戸打ち水大作戦」のイベントが行われ、30万人を超える都民が参加した。これが継続的に実施されれば、都市部のヒートアイランド対策にもなる。使う水が下水再生水なら、もっとよい。夏が蒸し暑い京都の町屋も涼しい住まいである。「うなぎの寝床」と呼ばれ、家の間口が狭く、奥行きの長いのが特徴である。また、土間で固めた「通り庭」が風通しを良くし、「千本格子」や簾戸など、京ならではの涼の工夫が随所に見られる。

**図2 打ち水**

もちろん、玄関先や表通りに打ち水する風習も守られている（図２）。

江戸時代には「もったいない」の精神で、省資源が当たり前に行われていた。たとえば、草鞋（わらじ）は稲や麦の藁（わら）で作り、旅人は草鞋が擦り切れると、宿場の定められた場所に捨て、近くの農民がそれを回収して燃やし、残った灰を肥料として畑にまく。リサイクルである。なお、旅人は自力で歩くから、排気ガスは出さず、草鞋を燃やして発生するガスはカーボンニュートラル（carbon neutral 炭素中立は環境化学の用語。直訳すれば、カーボンは炭素でニュートラルは中立なので、「環境中の炭素循環量に対して中立」となる意、草鞋を燃やして発生する炭素は、稲などの光合成で酸素に変換される）で、環境への負荷はない。

人間の心についても、江戸風を見直したい。今日の競争原理とマネー主義の IT 社会は、殺伐とした希薄な人間関係を招いた。先進国の中で日本の自殺率は上位を占めている。こんな世の中だからこそ、人の温もりを大切にした江戸風が必要になる。

「江戸しぐさ」というのがある。その歴史的真偽が議論されているが、とにかく良い習慣は見習うべきである。たとえば、「傘かしげ」は、雨の日にすれ違うとき、互いに濡れないように、傘を人のいない側に傾ける。「こぶし腰浮かせ」は、渡し船で後から乗ってきた客のために、こぶし分だけ腰を浮かせて席を詰める。江戸風は日本人の誇れる宝物であり、縮小社会を実現するための基本精神にもなる。さて、読者の皆さんは受け入れる覚悟があるだろうか。

「持続可能な」を意味する英語（sustainable）のもとになる動詞（sustain）は、つまるところ「支える」の意である。ここでおもしろいことに気づく。サンスクリット語の「支える」を意味する動詞は（dhṛ）であり、これから派生した語が「ダルマ（drarma）」なのだ。ダルマ（達磨）はインド思想を特徴づける最大のキーワードであり、多様な意味を持つ言葉であるが、おおざっぱに言えば「秩序」である（図３）。だから、「ダルマさんが転ぶ」と「秩序が破壊」する。すなわち「持続不可能」になる。しかし、ダルマさんは七転び八起きする。

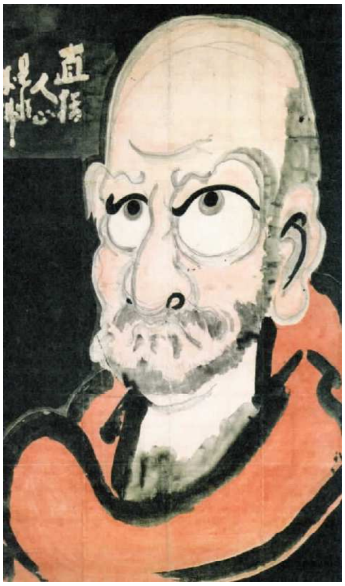

**図3 達磨図（白隠慧鶴の禅画）**

日本列島はるか縄文の時代には、人々は「山川草木」を尊び、自然に従って生活していた。つまり、ダルマさんは起きていたのだ。近年の考古学は、理化学や工学などを応用した学際的研究によって、長い縄文時代の後期について、従来よりも詳しい知見を提供してくれるようになった。それによると、思いのほか、質の高い精神文化に江戸風とは異なる縄文風の叡智を見い出せるかもしれない。もし、そうであれば、その叡智が「千の風」になって、持続可能な社会の実現に向けて吹き渡っていくことを期待したい。

元大阪府大東市立諸福中学校
赤木　俊雄

## ■ 現場を知る人の助言はありがたい

……………2020年3月16日

パイナップルの周りに防寒用のビニルを張りました(写真左)。厚さ0.3mm のビニルシートを支柱に巻きつけて穴をあけ、ビニルひもでくくり、 100円ショップで購入した洗濯バサミで止めました。しかし、強風でほとんど破れてしまいました。

先日、学校の農園の見学に来られた方が、ビニルが破れない方法を教えてくれました。それは「ホームセンターへ行くと、支柱の直径に合ったプラスチック製のクリップが売られているはずだから、それを使うとよい」ということです。早速、目的の店へ出向くと、あるではありませんか。左の写真の左側のクリップは強力、中央の洗濯バサミはその右の普通の洗濯バサミと比べてバネが強力なのです。

この便利な品物を昨年の段階で知っていたら、パイナップルの冷害被害は少なかっただろうし、10時間という作業時間の浪費もなかったはずです。やはり、現場をよく知っている方に聞くのが一番です。「農園に人を招くと、良い知恵を授けてくれる」という貴重な経験をしました。

## ■ 今後へ向けての想いを実現するために

……………2020年4月11日

先日、勤務校の教頭から連絡があり、技術科に新たな教員が赴任してくるという知らせがありました。私は他校で仕事をする気はないので、退職せざるを得ません。

そんなとき、注文していた種籾が JA から自宅に届きました。今年も、米作り、大豆の栽培、パイナップルの収穫、サトウキビからの砂糖作り、「ミュージカル 未来へコメ」を完成させる、子どもたちと楽しく過ごす、日本の食農について幅広い方々と交流するなどの計画を立てていましたが、すべてだめになりました。

何としてもこうした想いを実現したいと考えていますが、よい方法が見つからないでいます。

今回の雇い止めの件で皆さんから激励のお便りをいただいています。同僚の石野さん(編集部註：石野愛枝氏)からは「技術・家庭科の知識は退職後も役に立ちます」とお便りがありました。織物の作品を楽しそうに作っておられるそうです。私も、35年前、棉を植えたことがあります。糸車を買って綿繰り機を作ろうと思い、木製のネジの溝を彫るノミも買いました。一時期は織り機を購入することも考えました。その頃

は教具の機織り機を作ることもしました。その後にいろいろなものを作った経験が今生きています。

今、実家のある岡山に来ています。農作業の服の縫い物、ナップザックのファスナーの交換のために足踏みミシンを使おうとしたら、ベルトが切れています。これから買いに行きます。資源を大事にしたいですが、手間がかかります。

熱意はすばらしいので、学校教育にこだわらず、今考えていることを地域で行ったらどうでしょうか? 私は、15年以上前から、東京都練馬区の農業者や地域の人たちとともにNPO法人「畑の教室」で活動し、その理事もしています。

近くに農業をやっている人はいませんか? あるいは、地域の人が使える農地はありませんか?

（東京・野田知子氏）

地域での食農活動をしたことは今までありませんでした。今、実家のある岡山に来ていますが、倉敷市の子ども食堂で出会った小学校５年生の児童に尋ねると、学校では稲の栽培はしたことがないとのことです。むろん、田植えや稲刈りの経験はありません。しかし、おじいちゃんにトラクターに乗せてもらった経験はあるそうです。

ありがたい助言をいただきましたので、早速、実践してみます。まずは近所の子どもに稲作りの体験を聞いてみます。

**岡山暮らしを始めて１ヵ月**

皆さん、お元気ですか。私は、現在、大阪を離れ、岡山県倉敷市で生活しています。この時期、裏山に登ると、山桜が見えます。

ところで、今春から倉敷市立自然史博物館の友の会に入会しています。インターネットで県内の花鳥の様子やタンポポ調査の結果が毎日３通ほど来ます。どのように撮影されているのかわかりませんが、写真は綺麗です。私の知らないものが多いので、大阪のシニア自然大学校に２年間行っていたことは恥ずかしくて言い出せません。

（岡山・赤木俊雄）

## □ 常任委員会からのお知らせ

会員の皆さんへはすでに以下の内容のような案内が届いているかと思います。現在の社会状況に鑑み、常任委員会では、連盟規約第6条第2項に基づき、今後の活動その他について以下のように決定しましたので、ここにお知らせします。この件に関するご意見などがありましたら、最終ページに記載の連絡先へお願いします。

**＜決定事項＞**

1.全国大会および連盟総会について

当初予定していた今夏の大会(第69次技術教育・家庭科教育全国研究大会)の開催は見合わせる。また、例年、大会開催期間中に実施していた連盟総会についても、同様に実施を見合わせる。これらの開催については、今後の見通しが立つようになった段階で、改めて実施計画を検討し、速やかに会員に連絡する。

2.会費について

会計年度は総会開催時から翌年の総会開催時までとなっている関係上、それにあわせて本年度(2019年度)の会計年度も延長する。したがって、来年度(2020年度)会計も2019年度会計として扱う。本年度(2019年度)分の会費未納者については、納入のお願いをする。なお、すでに2019年度分の会費納入者については、2020年度分の会費は徴収しない。

3.今後の活動について

産教連は、1949年２月の発足以来、すでに70年を経過している。現在、記念誌の出版を計画し、鋭意準備を進めている。また、会員数の減少と高齢化もあり、今後の活動についても模索、考慮する必要がある。今後、しかるべき時期に総会を開催し、会のあり方や活動について判断することが必要であると考えている。

### もっとメーリングリストの活用を

会員の皆さん、メーリングリストの産教連ネットをご存じですか。産教連ネットは会員の情報交換の場として利用できるので、積極的に活用してみませんか。

インターネットの普及により、メールアドレスを取得している会員は、このところ、着実に増えています。「こんな図書を見つけたので、読んでみてはいかが？」「こんな情報を耳にした。どなたか詳しいことを知りませんか？」などといったことから、情報交換の輪が広がることもあります。

現在、新型コロナウイルスの感染拡大によって、多くの人が集まっての会合が自粛されています。このようなときこそ、産教連ネットを利用しての議論も有効と考えられます。

産教連ネットに情報を発信することが活用の第一歩です。産教連通信でも、産教連ネットへ発信された情報を編集し直して紹介しています。

産教連ネットへの登録に関しては、まずは事務局(最終ページに連絡先記載)へ。

# 図書紹介

**『みずとはなんじゃ?』かこさとし 作/鈴木まもる 絵**
**25×23cm 31ページ 1,500円(本体) 小峰書店 2018年11月刊**

本書は、加古里子さんが亡くなる(2018年5月2日逝去)直前まで手がけていた最後の絵本である。絵を手がけたのは、鳥の巣研究でも有名な絵本作家の鈴木まもるさんで、加古さんから本書の完成を託され、無事刊行にこぎつけた。この本の制作にあたり、加古さんは、机に向かうのも難しいなか、水を通じて共生の大切さを子どもたちに伝えたい一心で、何度も原稿とラフスケッチを点検したそうである。

この本は、日々の暮らしの中で出会う、身近で不思議な水の性質をいろいろ示しながら、その重要性を読者に伝えている。さらに、地球環境について目を向けるきっかけにもしてほしいという、加古さんの強い思いが伝わってくるようで、科学する心を育む絵本であると言える。その意味で、この本は、子どもだけでなく、大人もぜひ読んでほしいと思っている。

ところで、本書のタイトル名だけを耳にしても、絵本とは気づきにくい。この本を手にして、ページを繰ってみた。「かなりむずかしい内容をうまく絵本としてまとめている。さすが加古さんだけのことはある」と書評子は思ってしまった。

実は、書評子は、加古さんの話を間近で聞いたことがある。今から40年近くも前のことである。静岡県熱海市で行われた第32次技術教育・家庭科教育全国研究大会(1983年実施)の記念講演の講師として招かれた加古さんが、「子どもの発達と遊び・労働・技術教育」というテーマで講演したのだった。

では、「あさ おきて、かおを あらう みず」という文章で始まる本書の中味を少し紹介する。

まず、「水は、無色透明で、においもない液体である」という水の特徴と、「水は常温では液体で、条件によって気体にもなるし、固体にもなる。気体の状態の水は“水蒸気”と呼ばれ、固体の状態の水は“氷”と呼ばれる」という、水の状態変化を、絵と子どもにもわかる文章を使って説明している。ここでは、この状態変化の説明を“忍者”と“役者”にたとえて解説している。

その後、人間だけでなく、すべての動植物には水が必要であることや地球上の生きものは水の恩恵を受けていることの説明が続き、“料理人”と“医者”を登場させて、水のはたらきを解説している。そして、内容は次第に難しくなり、“クーラー”や“ふとん”をたとえに出し、水のはたらきを解説している。

最後に、水の大事なはたらき３つを再確認した後、地球環境に目を向けさせて締めくくっている。

さて、親子がいっしょに勉強するつもりで、親の膝の上に子どもを座らせ、この絵本を開いてみてはどうか。書評子だったらそうしてみたい。親のわかる範囲内の解説を加えながら、開いた本書を順に読み進める。その途中で絵を指し示し、「これは何をしているところ？」などと子どもに問いかけてみるのもよいだろう。逆に、子どものほうから親に質問や疑問が投げかけられることもあるだろう。それに対しては、親のわかる範囲で答えればよい。わからないときは「いっしょに調べてみよう」でよい。本書の内容をきっかけに親子の対話が弾めば、加古さんも大満足ではなかろうか。　　(金子政彦)

## □ 編集部ならびに事務局から

産教連通信の執筆要項を産教連のホームページ上で公開しています。この規定に沿って、原稿をどしどしお寄せください。原稿の送付先は編集部(下記参照)です。お待ちしております。

さて、昨夏の大会時の連盟総会を境に会計年度が切り替わっています。**ご自分の会費納入状況を確認したうえで、会費納入をよろしくお願いします。**

**また、人事異動や転居などで住所・電話(FAX)番号・勤務先などに変更があった場合には、ご面倒でも、すみやかに事務局までご連絡ください。また、メールアドレスの変更についても、同様に連絡をお願いします。**

**編集後記**

新型コロナウイルスによる感染拡大が全世界に広がり、その終息が見通せない状況です。日本でも緊急事態宣言が全都道府県を対象に出され、各種の商業施設・文化施設などの休業や閉鎖とともに、人々の外出制限がかけられています。

どこでどのように感染するかわからないため、編集子も、やむを得ず外出する際にはマスクをかけ、細心の注意を払いながら必要な用事を済ませています。読者の皆さんも、こうした生活をいつまで続ければよいのかと思いつつ、日々過ごしていることと思います。

こうした状況なので、これまで毎月定期的に実施してきた、東京サークル主催の定例研究会は当分の間、開催を見合わせることになりました。したがって、毎号掲載してきた定例研究会報告も、しばらく休載とします。また、諸般の事情を考慮し、12ページに記載のように、今夏の全国大会（第69次技術教育・家庭科教育全国研究大会）は開催取りやめを決めました。その関係で、毎年９月および11月発行の号に掲載してきた全国大会報告の掲載もなくなりますので、ご了承ください。

正常な経済活動が復活し、人々の生活が一日も早く元に戻ることを願わずにはいられません。（金子政彦）

産教連通信 No.51（通巻 No.232） 2020年5月20日発行

発行者　産業教育研究連盟

編集部　金子政彦　〒247-0008　神奈川県横浜市栄区本郷台5-19-13
☎045-895-0241　E-mail　mmkaneko@yk.rim.or.jp

事務局　野本惠美子　〒224-0006　神奈川県横浜市都筑区荏田東4-37-21
☎045-942-0930

財政部　藤木　勝　郵便振替 00120-8-13680 産業教育研究連盟財政部